皆殺しパーティ

天藤真

角川文庫 [illegible]

皆殺しパーティ

天藤 真

角川文庫 4582

昭和五十五年十月五日　初版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話東京二六五—七一一一(大代表)
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——利久商事　製本所——利久商事
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Korea 0193-146605-0946(0)

皆殺しパーティ

天藤真

目次

プロローグ　五
第一章　盗聴器の殺人　八
第二章　仮面家族　二九
第三章　挑戦トリオ　四七
第四章　悪徳の履歴　七四
第五章　急カーブの惨劇　一〇三
第六章　「死の家」　一二五
第七章　大爆発　一四六
第八章　消えた裏金　一七二
第九章　愛憎の遺書　一九二
第十章　最後のパーティ　二三二
第十一章　犯人X　二五三
第十二章　ある晴れた冬の午後　二六六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

エピローグ　二九八
解説　山村正夫　三〇〇

プロローグ

東名高速を百キロで飛ばすと、東京からおよそ二時間で富士川市のＩＣにかかる。

富士川市――この東海道メガロポリスの一支点は、かつては日本の代表的な城下町だった。静かな街なみと、独特のやわらかなことば遣いをする人々。そのどこにも、長い伝統に育まれた端正な気品と、しっとりしたおおらかさが、みちあふれていた。

だが、いまの富士川市は、昔ながらの〝お濠〟に囲まれた広大な旧城趾のあたりにわずかに当時のおもかげが残っているだけで、人口もそのころの四倍の六十万とふくれあがり、完全に現代的な工業都市に変貌してしまった。

スモッグが空をおおい、みどりの山肌はけずりとられて工場の敷地や宅地にかわり……日本列島のどの都市の例にももれない公害の街だ。

いや、あるいはそれ以上だろうか。この地区独特の公害として、海岸地帯に林立する製紙工場群が吐きだす廃棄物――ヘドロが、名勝富士川港を埋めつくして、マスコミの話題になったのはつい先年のことだから。

そして一九七×年。

この富士川市が、一連の異様な事件の舞台として、ふたたび全国の視聴を集めたのは、まだ一般の記憶に新しい。

その中心人物が、この富士川市の巨大なコンツェルンの巨大な独裁者、吉川太平という人物である。

富士川市の市民は、彼のことを、富士川の事業王と呼び、あるいは大ボスと呼ぶ。

彼の傘下の事業網は、当の製紙業はもちろんのこと、デパート・ホテル、交通・運輸の各部門に及び、なによりの特色として、新聞・テレビのマスコミの二大花形をそのがっしりとした手に握っているからだ。彼の富士川新聞は県の代表紙であるし、彼の富士川テレビは県内唯一の民間テレビだ。市内のちょっとした各種の企業で彼の息のかからないものは稀だろう。富士川市では比肩するものはおろか、足もとに及ぶもののない事業王である。

ボスという点でも市長の野方雄一郎をはじめとして、戦後歴代の富士川市市長は、ほとんど例外なく彼の〝友人〟であり、実質的には〝手先〟だった。市当局以外の公共団体でも陰に陽に彼の厄介にならないものはなく、従っていわゆる名士で彼に臣従の礼をとらぬ存在はない。シカゴのなにがしにひけをとらない大ボスということも事実だ。しかし、より適切には、彼を富士川の〝現代の藩主〟と呼ぶべきだろう。これだけの強大な武器と経済力をもちながら、彼も彼の事業も、富士川市のそとへは一歩も出ようとしないのが、その端的な現われだ。彼はただに〝富士川市の吉川〟であるより、市を〝吉川の富士川市〟とすることに、生涯の全情熱をかたむけてきた人物なのだ。郷土愛と事業欲の不思議な結婚が生んだいかにも日本的な所産である。

この初秋から晩秋にかけて、彼と彼の周囲を襲った事件は、富士川市の生んだ戦後最大の惨劇であった。無辜の市民二人をふくめて九名の生命が失われ、五人が行方不明となった。特に最後のショッキングな幕切れは、富士川市六十万市民を驚愕のどん底に叩きこんだ。

それにもかかわらず、中心人物の吉川太平が大有力者であったがために、そしてなによりも彼自身の手にマスコミの二大武器が握られていたがゆえに、事件の真相は全く隠蔽されたまま今日に至っている。

事件はスタートから、きわめて特徴的だった。彼はまずはじめ、殺害の予告を受けた。

それが脅迫とか、なにかそれに類したありふれた予告であったら、剛腹な彼は頭から問題にしなかったにちがいないが、この事件の特異性はその予告がひとりの青年の死という事実によってもたらされた点にある。青年は、ある男女の吉川太平謀殺の計画をもれ聞き、相手の正体を知ろうとして生命を失ったのである。しかもその青年は彼の親友、当時の市長野方雄一郎の息子であった。

彼は事件の当初から、その折々に詳しい手記をつけていた。ここに紹介するのは、その全文である。

手記は当初の〝予告の死〟の事件から始まっている。以下「わたし」とあるのは吉川太平氏自身のことである。

第一章　盗聴器の殺人

その悲劇の夜、わたしの「死の予告者」となった野方英吾が、若い女性を伴って、東京・大田区の北千束にある問題の旅館「ホテル喜楽」に入ったのは、記録によると午後八時一分のことであった。台風の接近が伝えられていたが、東京は夜になっても熱気が去らず、おしゃれの英吾はきちんとネクタイをしめ、上衣をつけていたが、女性はワンピースの軽装だった。

英吾はわたしの最大の親友野方市長の長子で、父が市長に就任してからは、若いながら事実上の院長役として、富士川市で最大の私立病院の経営に任じている青年である。わたしの家にもよく出入りしていて、医師としての腕はわたしがあまり買っていないので専ら若いもの相手だが、明るい社交的な性格で、家内などもお気に入りだった。

連れの女性は三村早苗といい、西銀座の商事会社につとめているタイピストだそうで、いまのところ、それ以上のことは知る由もないが、いっしょにホテルに行くぐらいであるから、英吾の風姿と地位にいかれた、はねかえり娘のひとりには相違なく、また英吾のそのほうの手並みは、わたしは家内から噂を聞く程度だが、話半分としても相当なものだったようである。ただし、二人としては最初のデートであったらしい。

案内役の英吾は、このホテルをえらんだ理由を、こう説明していたそうである。

「いっぺん、この近くの患者のところへ来たとき利用したことがあるんだが、フロントが低い窓口になっていて、中の人間と顔を合わせないですむから、きみにもいいと思ったんだ。プレイガールかなんかみたいにジロジロ見られたりするの、いやだろうからね」

連れの女性がどう受けとったかしらないが、あやしいものであった。すぐにわかるが、英吾はこのホテルの部屋の構造を、細かいところまで知悉していたふしがあるからである。

フロントのその低い窓口の上には、部屋の案内図が掲げてあり、空いている部屋と料金が一目でわかるようになっているそうだが、英吾がそれを見てえらんだのは、この日本的簡易ホテルでは上の部にぞくする、二階のかえでの間という一室で、となりのさくらの間のところには、すでにふさがっていることを示す赤ランプがついていた。まだ時刻が早いので、六室ある二階の他の部屋はぜんぶ空いていた。英吾が特にかえでをえらんだのは魂胆があったのだが、初めてのデートで気もそぞろだったらしい女性はそんなことに気がつくどころではなかったようである。

料金は泊りと二時間以内のショートタイムの二種になっていて、ショートの時間が切れると、あとはたとえ三十分でも泊り分をとられる仕組みになっているそうで、二人とも泊るつもりはなかったから、英吾がショート料金を払い、カギ代わりの部屋の札を受けとって、二人はかえでに上っていった。押しボタン式のドアだが、はじめ入るときは、フロントのリモコン装置で開くようになっているので、カギは要らないのだそうである。

三村という女性は、なかなか勇敢な現代娘らしく、あとで係官の質問に対して、部屋へ入って

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

からの英吾の行動を、ふつうなら顔が赤くなるようなことまであけすけに話しているが、それによると、以後はこういうことになる。

まずドアをしめたとたんに、英吾はそれまでの礼儀正しい紳士から、男性そのものに変身した。女性のほうでは、なにかもっとロマンチックムードみたいなものを期待していたらしいが、英吾の行動はきわめて実務的でストレートだった。彼としたら二時間というタイムリミットがあるから、ムード作りなどに手間ひまかけていられなかったのであろう。

かえでの間は、奥の寝室と、トイレ、シャワールームがついた控えの間と、二間つづきになっているが、はじめに控えの間で備えつけの冷蔵庫からのみものを出してのどをうるおしたのが英吾にとってせいいっぱいの待ち時間だったようで、のみものをおくと同時に、直ちに行動をスタートした。

女性は控えの間でいきなりワンピースを脱がされて下着一枚にされ、奥の寝間へ運ばれてふとんに横たえられ、あんどん式のスタンドのあかりのなかで、たちまち下着を脱がされて全裸にされた。ろくろく抵抗するふりもできないほど、英吾の手は素早く容赦がなかった。

初めて相手の目に全身をさらされたことでもあり、すべてあまりに目まぐるしくスピーディだったので、女性はすぐにも次の襲撃がくるものと覚悟してふるえていたが、それからの英吾のやることが、ちょっとかわっていた。

枕もとにしゃがんで、持参のバッグから聴診器のお化けのようなものをとり出し、先端のコップ型の道具を、床の間の鏡板にとりつけを始めたのである。

ここでちょっと部屋の説明をしなければならないが、寝室の一方の壁はコンクリートの厚い壁だが、他の一方、さくらの間との境のほうは、枕もとに小さい半間幅の床の間がついていて、床の間の壁の下のほうは鏡板が張ってある。あとでわかったが、空間を極度に節約するために、となりのさくらの間はこれと背中合わせのつくりになっており、ほかの部分はモルタル壁の押入れが互いちがいにはめこんであるが、床の間だけは分厚いとはいえ、両方から張り合わせた鏡板だけが境になっていたのである。

やがて英吾がとりつけを終わって女性のほうへ向いたので聞いたそうである。

「なんなの、それ？」

英吾はふたまたになったイヤホーンのコードを枕もとへもって来ながら、ニヤッとして答えたという。

「わからないのか。盗聴器に決まってるじゃないか。この式だと、集音マイクを向こうへもちこまなくてもいいから、この部屋なら使えると思っていたんだ。今晩はこれで、となりのお二人さんの愛のささやきを拝聴しようって寸法さ。どれ、調子はどうかな」

イヤホーンのひとつを耳に当てて試していたが、「うん、きこえる、きこえる。いいぞ」とうれしそうにうなずいた。これもあやしいものであって、初めてのようなふりはしているが、とうに実験ずみにちがいなかった。

「悪趣味ね。人権侵害じゃないの」女性は眉をひそめて非難したが、

「どうしてさ。向こうは聞かれてること知りゃしないし、こっちにゃ向こうさんがだれかわか

りゃしない。知らない人間の人権なんか侵害のしようがないじゃないか。ほら、きみも聞いてごらんよ。いまや真最中というところだよ」

英吾はもうひとつのイヤホーンを女性の耳に押しこもうとする。

「いや、あたし、こんなの聞きたくない」

女性は首を振って拒んだが、

「なにがいやだい。ほんとうは聞いてみたくてウズウズしてるんだろ。ここまで来て見栄を張ることはないんだぜ」

英吾は女性を抑えつけて、むりやりイヤホーンを押しこんだ。そういわれるとそういうことでもあるようで、女性は力ずくではしょうがないといった顔をしてイヤホーンに耳を傾けた。見てきたような描きかたのようであるが、わたしも妻の宇女子にたびたび類似の行為を強いているから、その表情が手にとるように浮かぶのである。

……はじめきこえてきたのは、絶え絶えな息遣いのような音だったそうである。それがあまり生々しく、間近だったので、女性ははっとして思わずわきを見たそうだ。かれらがすぐそばに枕をならべているような気がしたのだ。この盗聴器は英吾が出入りの電気屋に命じて作らせたのだそうだが、かれが自慢するだけあって、商品にしたら爆発的ブームを呼びそうな高性能のものらしい。

「ほら、よくきこえるだろ」英吾は満足そうに女性を見下ろしていったという。

「これが人間のいちばん赤裸々な歓びの声なんだ。声じゃなくて歌といったほうがいいだろな。

どうだい、おれたちの愛の船出に、こんなすばらしい伴奏はないだろう」

……事実、その声は潮が高まるように高まって、悲鳴に似た叫びさえきこえてきた。

女性はなおも弱々しくさからった。

「いやだわ、こんなの。あたし、こんな……」

「こんな声は出さない、というのかい」英吾はじわりじわりと愛撫を加えながら皮肉にいった。

「そんなこといってる口の下から、きみはあれそっくりのわめき声をあげるんだよ。いや、あんなもんじゃないな。おれが、そのかわいい唇から、これ以上はない、たまらない悲鳴をあげさせて、のたうちまわらせてみせてやるよ」

この宣言は直ちに実践に移されたようだ。女性は唇をかみしめてがんばろうとしたらしいが、それを見下ろしている英吾の気持は、わたしにも想像にかたくない。ある意味ではそうした瞬間こそ、男性の至楽なのかもしれない。だいいち、かみしめている唇自体が小さい獲物のひとつなのだ。わたしならばまずその唇に襲いかかり、こじあけ、舌を吸いだし、なぶりつづけになぶってやることから始めるだろうし、英吾もたぶんそうしたのだろう。つづいて始まる本格的な攻撃のまえには、女性のそんな可憐な防壁などはものの数でないし、事実もそうなったのだろう。その点、英吾は経験はまだしもとして、わたしにはない若さと体力があり、初めての獲物に対してひときわ勇み立ってもいたであろうから、彼の攻撃の強烈さはけだし見物であったろう。女性はひとたまりもなく英吾のいったままの状態にされてしまい、しまいには、耳にきこえている声がイヤホーンからくるのか自分の唇から出ているのか、判別がつかなくなってしまったようである。

ところが、雷雨でも通りすぎたようなあんばいに、英吾の攻撃がぱったり、中休みになったという。以下のことは、一言一句がきわめて重要な意味を帯びているから、係官と女性との問答をそのまま転記させてもらうことにしよう。

係官　そのときの野方氏の様子を話してください。

女性　なんだかへんだと思って、そっと目をあけてみると、彼はひきつったような顔で目を宙にすえていました。わたしのことは忘れて、ほかのことにすっかり気をとられているような様子でした。「どうしたの」と聞きますと、ひどく怖い顔になってわたしを見下ろして、「きかなかったのか。やつらたいへんな相談をしてる。人殺しの相談だ。それもおれの知ってるひとだ。さすが名は出さないが、富士川市の事業王とか大ボスとかいってるからまちがいない。吉川太平といって、おれのおやじにも大事なひとなんだ」というのです。

係官　ちょっと復誦（ふくしょう）します。富士川市の事業王、大ボス、吉川太平……以上の三つのことばにまちがいはありませんね。

女性　はい。はっきりそういいました。

係官　どうしてあなたにはきこえなかったのですか。

女性　わたし、いまいったように、くたくたにされていて、それどころではなかったし、それにだいいち、イヤホーンが抜け落ちて畳のとんでもないほうに行ってしまっていたんです。

係官　いつ抜け落ちたのかおぼえていませんか。

女性　ええ。ぜんぜん。
係官　どんな拍子にとれたんでしょうね。
女性　どんな拍子って、自分でも体がどうなってるかわからないぐらい色々にされたから。……そこまでいちいち話さないといけないのですか。
係官　そういうわけではありませんが、時間の見当をつけたいのです。だいたいの時間がわかると、かれらがいつごろからそういう話を始めたか、野方氏がそれにいつごろ気がついたか、そのへんがはっきりすると思うのです。
女性　（考えて）そうですね。イヤホーンはいつ抜けたのか見当がつきませんが、英吾さんの動きがとまって、わたしが目をあけるまで、なんていうんですか、正常位ですか、そういう姿勢でしたから、その姿勢になってから、あまり時間は経ってなかったと思います。
係官　すると、いまの話をしているときも？
女性　ええ。英吾さんはわたしの上にかぶさって、わたしを占領したままでした。でも、その……占領している部分が力がなくなって、それでわたし、へんだなと思ったんです。
係官　それからどうしましたか。
女性　英吾さんもイヤホーンが抜けているのに気がついて、とってわたしの耳にさしてくれました。
係官　声がきこえましたか。
女性　ええ。二人の話し声がきこえました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com